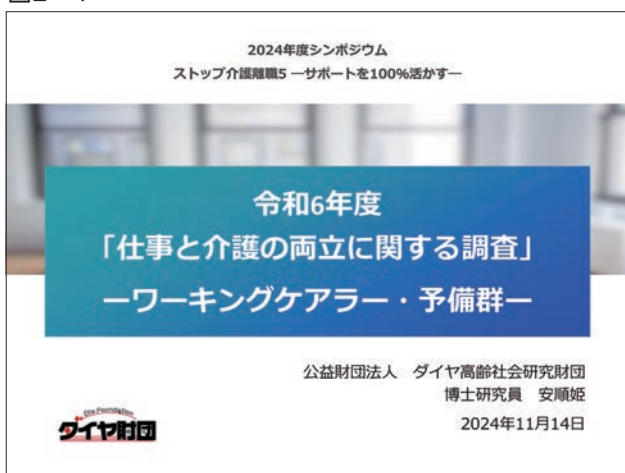


# 令和6年度「仕事と介護の両立に関する調査」 ーワーキングケアラー・予備群ー

公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団 研究部 博士研究員  
安 順 姫



図2-1



ダイヤ高齢社会研究財団の博士研究員の安と申します。よろしくお願いたします。ここでは当財団が昨年度から開始した三菱グループ・リサーチモニター・プロジェクトの一環として実施した「仕事と介護の両立に関する調査」の中から、ワーキングケアラーとその予備群に関する結果をご報告いたします。

## 1. 調査概要

この調査は働く人の介護に関する現状を包括的に把握することを目的に、既に介護をしている社員の状況に加え、その前段階にある社員の生活状況や職場環境などを調査しました。この発表では介護の有無や近い将来に介護を担う可能性についてご報告します。調査は三菱グループに所属している企業の社員を対象とし、各社のイントラネットを活用したオンライン形式で実施し、無記名での回答をお願いしました。2024年の7月に開始し、この発表では8月までに調査が完了した4社、合計1万9286名のデータを基にまとめました。(図2-2)

図2-2

### 調査概要

調査目的：介護の有無や近い将来に介護を担う可能性、介護に対する認識、職場環境などの実態把握を目的に調査を実施

調査対象：三菱グループ※に所属している全社員

調査方法：オンライン調査（無記名）

調査時期：2024年7月に開始

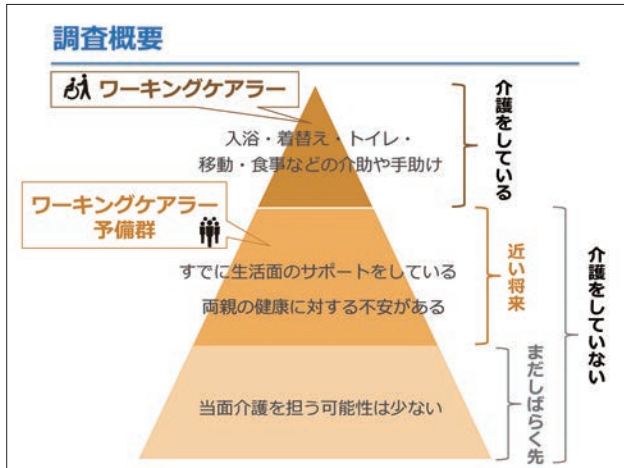
回答者数：19,286名（対象者の概数 63,000名）

※三菱グループ企業のうち8月までに調査が完了した4社分を集計。現在順次調査を実施中。

この調査では、日常生活において入浴、着替え、トイレ、移動、食事などの動作をする際に、

何らかの介助や手助けを行っている社員を介護をしている人、すなわち「ワーキングケアラー」としました。介護が始まると日常生活の中で介護を必要とする人、要介護者に対しては公的介護保険などが適用されますし、介護をしている社員に対しても企業による仕事と介護の両立支援が行われるようになってきています。しかし、介護をしていない社員にも親に対して既に生活面でのサポートをしている人や、親の健康に不安を抱えている人もいると考えられます。これらの社員を「ワーキングケアラー予備群」としました。(図2-3)

図2-3



両親の健康への不安や生活面でのサポートに関して社員が負担を感じたとしても、ワーキングケアラー予備群に対するサポートはほとんどなく、家族である社員が担う必要があります。この層に含まれる人は、近い将来介護を担う可能性がある、あるいは、本人は認識していないが既に介護が始まっていると思われる人もその中に含まれる可能性もあります。もう一つの層は健康不安などがある親がいない社員で、当面介護を担う可能性が少ない人です。この調査では年齢などの制限を設けておらず、全社員を対象とすることでこれらの実態を把握しました。

## 2. 結果

回答者の年齢分布を見ると、45歳から64歳までの社員が多かったですが、40歳未満の社員からも一定数の回答があり、幅広い年齢層の社員から回答が得られました。

最初に、働きながら家族の介護をしている人、つまりワーキングケアラーの割合を見ると、回答者全体の10.7%を占めていました。

次に年齢別に見ると、ワーキングケアラーの割合が最も多かったのは55～59歳で、次が60～64歳。全体で見ると59歳までは年齢が上がるにつれて介護を担う割合が増加していることが分かりました。

また、ワーキングケアラーの介護の状況について結果の一部をご紹介します。「介護をしている」と回答した社員が何人の家族を介護しているかを見ると、8割は「1人」の家族を介護していますが、約2割が「2人以上」つまり複数の家族を介護していることが分かりました。

さらに、回答者以外に介護を担っている家族の有無については、自分以外に介護を担っている家族が「いない」と回答した社員が26.9%でした。このように、ワーキングケアラーの約3割は介護をするに当たって頼れる家族がいない状況であることが分かりました。



ここであらためてこの調査でのワーキングケアラー予備群とは何かについてご説明します。調査概要でも少しご説明しましたが、この調査でのワーキングケアラー予備群とは、①日常生活において、親に対して生活支援をしている。②親の健康状態に対する心配がある。この二つの要素のどちらか一つに当てはまる親が1人以上いる社員としました。結婚している場合は、配偶者の親も含みます。

生活支援においては、掃除や洗濯、食事の支度、ペットの世話などの日常的な家事の手伝い、携帯電話や家電などの操作方法といったちょっとした困り事への対応などが含まれます。健康状態においては、体力の低下やもの忘れ、認知機能の低下に心配がないかを尋ねました。

介護をしていない社員における二つの要素それぞれの実態について見てみます。まず、日常生活において、親に対して生活支援をしているかどうかについては「している」と回答した社員が、介護をしていない社員の52.3%であり、既に半数以上の社員が親に対して生活支援を行っていることが分かりました。

では実際にどんなサポートをしているのか、その内容をご紹介します。親に対する生活支援の内容で多かったのは、「ちょっとした困り事への対応」と「精神的な支援」で、それぞれ約3割でした。ここでのちょっとした困り事への対応は、先ほど説明した携帯電話や家電などの操作方法のほか、故障時の対応や蛍光灯の交換などが含まれます。精神的な支援は、話し相手や相談相手、電話、定期的な訪問などが含まれます。(図2-4)

次に親の健康状態に対する心配があるかどうかについては「ある」と回答した社員が、介護をしていない社員の57.4%を占めていました。

その内容を見ると、「体力の低下」に関する心配が最も多く47%。次に「物忘れ・認知機能の低下」が27%。「気分の落ち込み・不安」に対する心配が16%でした。(図2-5)

図2-4

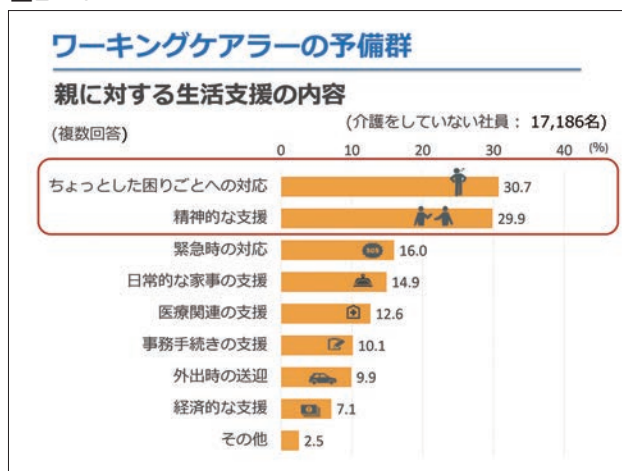
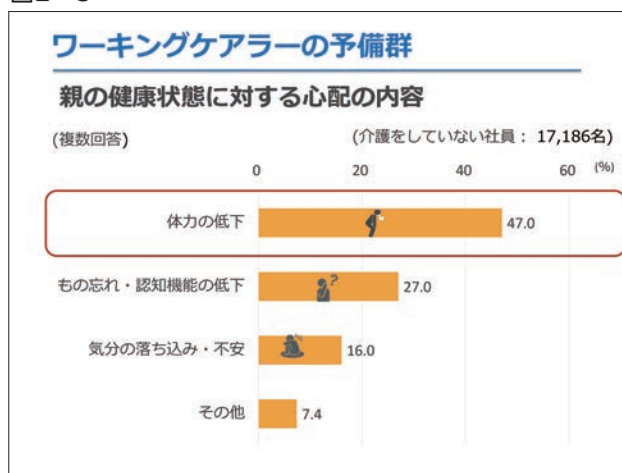


図2-5



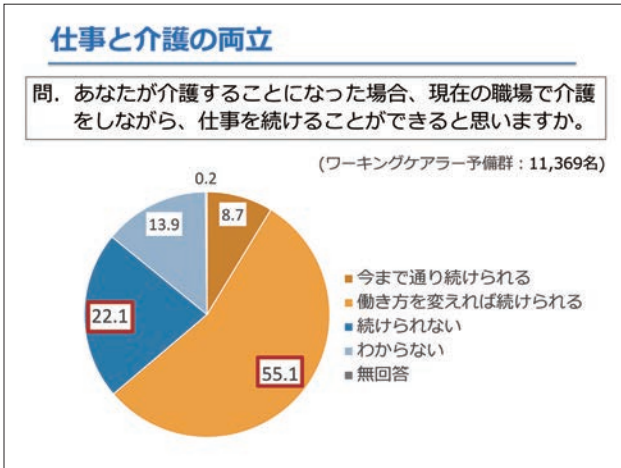
①親に対して生活支援をしている、②親の健康状態に対する心配がある、この二つの要素を基に算出したワーキングケアラー予備群の割合を年齢階層別に調べました。その結果、ワーキングケアラー予備群は40代・50代が多いことが分かりました。一方で、若い世代について見てみると、30代では6割の社員が、29歳以下では半数近くがワーキングケアラー予備群に該当していることが分かりました。

最後に、ワーキングケアラー予備群に該当する社員の仕事と介護の両立への思いについての結果を円グラフに示しました。もしあなたが介護することになった場合、現在の職場で介護しながら仕事を続けることができるかどうかという質問に対して、半数以上の人「働き方を変えれば続けら



れる」と回答しています。その一方で、現在の職場では仕事と介護の両立が難しいと感じている社員が約2割いました。(図2-6)

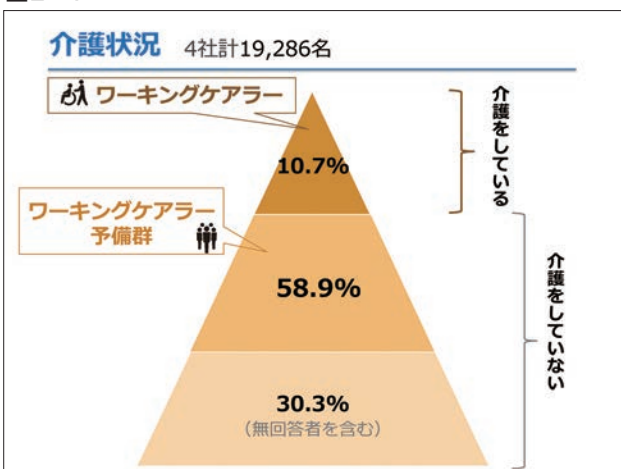
図2-6



### 3. まとめ

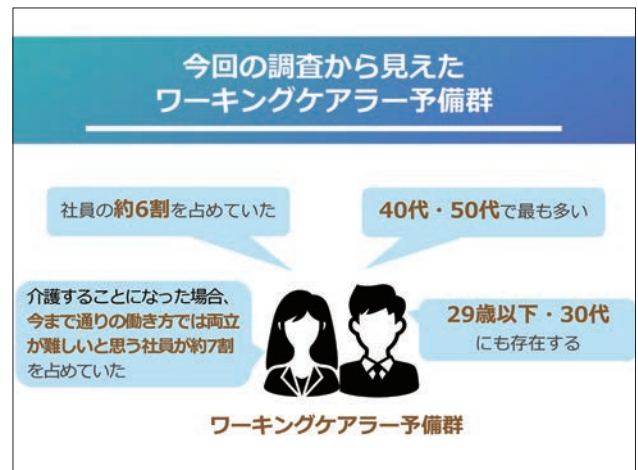
今回の4社、1万9286名を対象とした実態調査の結果、ワーキングケアラーは全体の10.7%を占めていました。また、ワーキングケアラー予備群は全体の58.9%に達しており、この層に含まれる人は将来介護を担う可能性があると考えられます。全体の30%は、今回の調査の予備群には該当しなかった社員となります。(図2-7)

図2-7



次に、今回の調査から見えたワーキングケアラー予備群についてまとめます。社員全体の約6割がワーキングケアラー予備群でした。年齢別に見ると40代・50代が多かったですが、29歳以下・30代の若い世代にも予備群が存在することが分かりました。また、予備群の約7割が介護をすることになった場合、今までどおりの働き方では両立が難しいと思っていました。(図2-8)

図2-8



今後の取り組みです。本日は速報として4社の結果をご報告しましたが、この調査は現在も実施中です。今後はこれらの結果を合わせまして、三菱グループ・リサーチモニター・プロジェクト関連特設ホームページに随時結果を更新していく予定です。また、次年度からの第2段階では、現在介護をしている社員などを対象に具体的な支援ニーズを把握するための追跡調査を行う予定です。

最後になりましたが、本調査の結果が今後の介護離職防止に向けた支援策を検討する際の参考資料になれば幸いです。ご清聴ありがとうございました。

三菱グループ・リサーチモニター・プロジェクト関連ホームページ

